立ち読み版

魔法少女 W 調教

ダブル

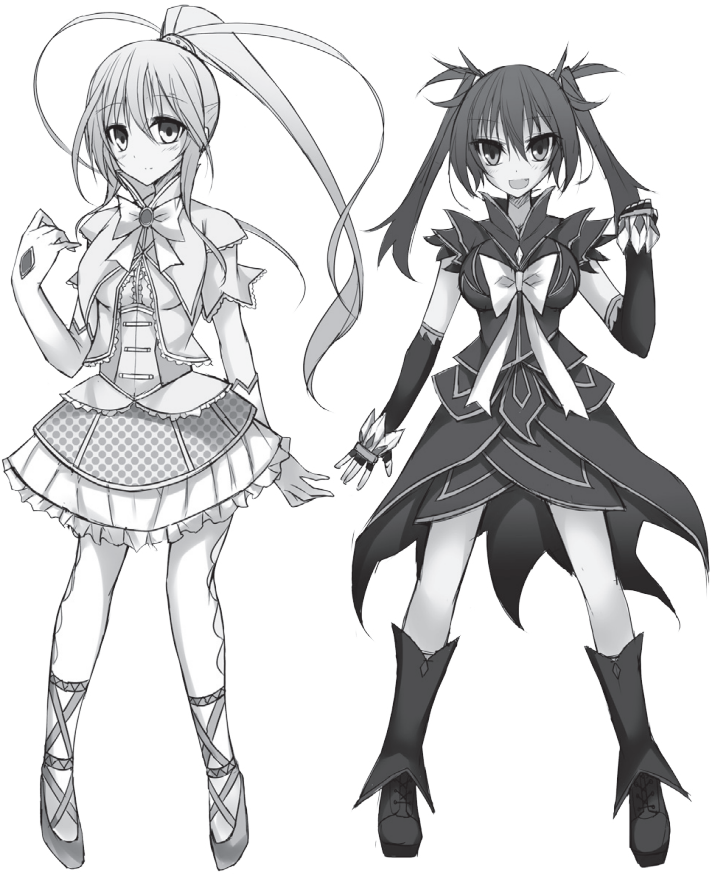
フレイア&クリスタ

小説 酒井仁　挿絵 すてりい

プロローグ 006
第一章 仕掛けられた悪意 019
第二章 甘い顔で近づく獣 070
第三章 魔法少女包囲網 115
第四章 燃え尽きる焔 155
第五章 聖泉が穢される時 192
第六章 散華 235

登場人物紹介

Characters



フォーチュンクリスタ

水のような清らかな魔法少女。
歌声で魔獣を浄化する力を持つ。
心優しいが流されやすい一面がある。
魔法少女の姿でアイドル活動中。

エターナルフレイア

炎を思わせるパワフルな魔法少女。
肉弾戦が得意で明るく活発。
男女ともに人気がある。
考えるより先に動いてしまうタイプ。

（こんなの……なんてことない……どうってこと、ない……ッ！）
目の前の勃起ペニスが急に存在感を増したように感じる。
特に亀頭はまるで拳ほどにも見え、こんなものを本当に頬張れるのか、頬張ってしまったらどうなってしまうのか、不安で胸が押しつぶされそうだ。
（有希ちゃんを守れるのは、あたしだけなんだ……！）
あーんと大きく口を開いた時、目尻に熱いものがこみ上げる。
泣きたくない。
こんな卑怯な男に弱音なんか見せたくない。そう思っても、それは大粒の涙となって少女の頬を伝い落ちた。
そして――――フレイアは生まれて初めて男の亀頭を口いっぱいに頬張った。
「ん……ん、むぅ……っ」
苦しい。
思った以上にボリュームのある亀頭で、口の中はいっぱいだ。顎が痛み、唇の端から涎が垂れ落ちそうになる。反射的に息を吸い込むと、唾液が喉を滑り落ちる。
「おほっ、いきなりバキュームフェラとはやるじゃねえか。そうそう、ちんぽにしゃぶりついて、せいぜい俺を楽しませな、お友だちのためにもな」
（楽しませるって言ったって、いったいどうすればいいのよ……）
さっき手でしごいていたようなことを口ですればいいのだろうか。

フレイアは目いっぱい口を開けて、もう少し深くまで陰茎をくわえ込む。下手すると息が詰まりそうだが、どうにか唇でカリの部分を擦ることに成功する。

「んっ、ぐぷっ、んふぅう……」

ぐっぷ、ぐっぽ、じゅぷっ。

息苦しさと顎の痛みで、自分がペニス……男性器をくわえていることをしばし忘れそうになるのは、不幸中の幸いだった。

けれど、口の中の唾液を飲み下すうち、ムッと鼻をつく男くさい臭い、そして微妙なしょっぱさを舌に感じ始める。

（この臭いにこの味……これ、おちんちんの味……？）

服装こそいかにもヤクザ風だが、北宮の股間は特別不潔ではなく、男性用化粧品の香りが漂う。だがいくら清潔で小ざっぱりしていようと、そこは男性が排泄をする器官。それを口で味わっているという事実に、嘔吐感がこみ上げてくる。

「いいぞ、もっと奥まで飲み込めッ」

「んむぅううっ？」

不快感に一旦口を離そうとした、まさにその時。

北宮の大きな手がフレイアの後頭部を押さえつけ、屹立（きつりつ）したペニスに向けて思いきり頭を押し下げたのだ。

ぐぷぷっ、と幹の半分ほどが少女の喉にねじ込まれ、フレイアの息が完全に止まる。

「んぐ、ぐぅううっ！」
「おうっ、なんて窮屈な口の中だ……いいぜ、たまんねえ」
呼吸困難といきなりの状況に、魔法を振るう余裕もない。
それをいいことにツインテールを両手で掴み、乱暴にペニスで少女の口内を犯す。唾液が口の端からこぼれて北宮の下腹部を汚すが、少女の口淫（こういん）の心地よさに、夢中で快楽を貪り続ける。
（くっ、苦しいッ、気持ち悪いッ……い、息ができない……！）
あまりの苦しさにフレイアは顎を閉じようとする。
だがその締めつけは逆に陵辱者にさらなる快感を与える結果となってしまった。
北宮は息を荒らげながら、自分から腰を突き上げる。少女の喉奥を激しくえぐり続け、呼吸困難に震える少女の姿に興奮していた。
「女の喉を強引にぶち抜くのは最高だぜ……えずく度に喉の奥がひくつきやがる！」
頭をがくがく揺さぶられ、喉奥を突かれて酸っぱい胃液がこみ上げる。
気が遠くなりそうになった時、いきなり男は「うぉぉっ」と叫び、ずぽりとフレイアの口から陰茎を引き抜いた。
「げほっ、げふ、けほんっ！　な、何……きゃあっ？」
新鮮な空気にむせかえる魔法少女の目の前に、唾液に濡れた亀頭があった。
あの、爪でつけたような溝が左右に広がったかと思うと、そこから練乳のような白い液

体がびゅるるる〜っと勢いよく噴き出してきたのだ。
「おう、おううっ……！」
「きゃっ、ん、んぅうう〜〜〜っ！」
びゅるっ、どびゅっ、びゅばぁああっ。
陰茎が上下に大きく跳ね上がるリズムで、白い液体はポンプに押し出させるように勢いよく噴き上がる。フレイアの額に、鼻に、頬に、そして真紅の髪の毛にどばどばと白濁がまき散らされる。
粘性を持ったそれは、まるで糊のようにべったりと少女の滑らかな肌にへばりつく。
それは体内から放出されただけに熱いほどの温度があり、しかも猛烈に生臭かった。
（なにこれ……こんな変な臭い、嗅いだことない……！）
これは明らかに尿とは違う液体。唇に付着したそれを手の甲で拭うと、ぬるぬるとした感触がさらにおぞましい。放出は恐ろしく長く続き、魔法少女の衣装にまでこの不快な体液がべったりと染みを作っていた。
「ふぃ〜っ……ガキのイラマチオも悪くねぇな。ええ、どうだ、魔法少女ちゃんよ。初めてザー汁を顔面で受け止めた感想は？」
「ザー……汁……？」
「ザーメンだよ、ザーメン。精液もわかんねえのか」
精液……なら保健体育で習った記憶がある。

彩夏はあまり興味をそそられなかったが、確か男性が女性を妊娠させるための精子の詰まった液体のことだ。

「ひっ、精子……？」

「そうさ、一人前のエロ女は、こいつを上の口でも美味しく味わうんだぜ」

「んぅううっ⁉」

処女の頬にへばりついた白濁を指ですくったかと思うと、北宮はやおらその指をフレイアの口に突っ込んできた。

突然のことで避けきれず、フレイアはザーメンまみれの男の指で口の中をぐりぐりとかき回される。あの強烈な異臭と苦しょっぱい味が口の中いっぱいに広がって、嘔吐感は一気に高まった。

「ぐぇえっ！　げほっ、げふ、うぇえっ……！」

ザーメンの味を口の中から追い出そうと、フレイアは何度も唾液を床に吐き出す。もし飲み込んだりしていたら、確実に嘔吐していただろう。

「げほ、げふっ……な、何考えて……こんな、おちんちんから出たものを口の中になんて……ぎゃっ」

「なぁ～に床汚してんだ、このクソガキ！」

いきなり後頭部を踏まれ、フレイアは自分の吐いた液溜まりに顔面をぶつけてしまう。そのまま靴底でぐりぐりと踏みにじられ、頬にべったりと唾液と精液がついてしまう。

（うぅ、タバコ臭い……っ）
強引に舌で唇を割られ、ニコチン臭い唾液にまみれた舌が侵入してくる。
口を閉じたくても、スキンヘッド男の分厚い手が頬を掴んできて、閉じられない。そうして口の中を蹂躙されている間も、痩せぎす男が乳房を揉みながら、首筋に舌を這わせ、ヒップに勃起したものを押しつけてくる。
「おらお前ら、こっちのセッティングまだだっつうの。がっつくんじゃねえよ」
「す、すんません兄貴」
北宮の怒声に、慌ててフレイアから身体を離す男たち。
どの道、フレイアには彼らに逆らう権限はない。言われるままにソファに座らされると、両側に男たちが腰を下ろし、正面に北宮がビデオカメラを構えている。
「……そんなもん、撮ってどうするんだよ。あたしを脅すなら、もう十分だろ」
「くくっ、そう言うなって。世の中にゃお前のファンとやらもそれなりにいるらしくてなあ、俺は知らなかったんだが、ネットじゃお前のファンサイトもあるそうだぜ」
「ああそうさ。魔法少女のコスプレしたアダルトビデオも出回ってるんだぜ」
そんなものが流通していたとは、まったく知らなかった。
魔法少女はあくまでも魔獣を退治する正義の味方。まさか北宮のようなヤクザな男以外に、自分たちを性的な目で見る人間がいるだなんて想像もしていなかった。
（他の人も……こいつらみたいにあたしたちをいやらしい目で見てたって言うの？　なん

で……どうして……あたしたちは、みんなのために戦ってるのに……）

今までの自分の戦いが汚されたような気がして、フレイアは不意に泣き出しそうになる。だが、北宮やこのチンピラたちの前で弱みは見せたくないと思い、必死に涙を堪える。

「よし、始めていいぞ」

「へっへへ、今度は俺とキスしようぜ、魔法少女ちゃ～ん」

痩せぎす男が唇を少女の頬に押しつけながら、太腿を撫でまわしてくる。

フレイアが顔を背けようとしても、反対側からスキンヘッド男が首筋をねぶりながら、胸に手を伸ばしてくる。どうやっても少女に逃げ場はない。

「さあて、この立派なパイオツでも吸わせてもらおうか」

「この可愛らしいお口に、俺のちんぽをしゃぶらせてやるからな、ぐひひひ」

白くて丸い乳房が露わになると、早速スキンヘッドが吸い付いてくる。

痩せぎすは太腿の奥に手を潜らせながら、フレイアの唇を舌で割って絡めてくる。腰に回された手が怪しく動き、少女のヒップを無遠慮に揉みしだく。この、屈辱的な行為の一部始終を、冷たいカメラのレンズが捉え、記録している。

（くそう……くそぉ……っ）

カメラを構えた北宮は、くわえ煙草でにやにやといやらしい笑みで辱められているフレイアを見物している。

単に犯されるというのではなく、犯されているところをこの卑劣な男に見られていると

いうのが、余計に腹が立つ。そして何より腹が立つのは、北宮に何十回となく犯された自分の身体が、愛撫に敏感に反応するようになったことだ。
「おぉっ、いい具合に乳首がしこってきたぜ。もう感じてるのか？」
「おまんこもしっとり濡れてきたぜ。こりゃあ兄貴に相当仕込まれたんだな。ガキの癖に淫乱な身体してやがるぜ」
「ちがっ……気持ちよくなんか、ないっ」
痩せ男は少女の怒り顔に下品な笑みを向けると、するりとショーツを脱がせてしまう。
「あっ」
次の男の行動にフレイアは息を呑む。
男は剥ぎ取ったショーツの、まさに股間に触れていた部分を鼻に押しつけ、ふんふんと匂いを嗅ぎ始めたのだ。
「や、やめろよっ」
「ふはふは、いい匂いがするぜ、こいつぁ一人前のメスの匂いだぜ～」
あろうことか、男はその部分を口に含み、くちゅくちゅとしがみ始める。男の変態的行動にフレイアはぞっと寒気がする。
「どれどれ、魔法少女のおまんこが本当に濡れてるかどうか、俺が味見してやるぜ」
「きゃっ」
スキンヘッド男がフレイアの片足を掴んで持ち上げる。

不意をつかれた少女の足が軽々と吊り下げられ、まくれたスカートを少女は慌てて抑える。しかしスキンヘッドはその手を払いのけ、ビデオカメラの前でフレイアの下肢を大股開きにして露出させる。

「や、やめろっ、み、見るなぁッ」

「おうおう、いっちょ前にヘアも生えてんじゃねえか。ほうれ、カメラの向こうの皆さんにご開帳してやりな」

足を閉じようとするが、すかさず痩せぎすが反対側の足を押さえに来る。スカートの裾が無慈悲にめくり上げられ、少女の局部が丸見えになってしまう。

「いや……やだよお……」

「どれ……まだちっとお湿りが足りねえ感じだな。俺が濡らしてやるよ」

「いやぁああっ」

少女の片足を掴んだまま、スキンヘッドがソファから下りてフレイアの正面にしゃがみ込んだ。そして少女の股間に顔を押しつけると、ぴちゃぴちゃとねぶり始めたのだ。

「おら、自分ばかり気持ちよくなってちゃ駄目だろ。俺のちんぽにもちゃんとご奉仕してもらおうか」

「ひいっ？」

痩せぎす男はかちゃかちゃとベルトを緩め、イチモツを取り出した。

そしてソファに片足を乗せ、フレイアの顔の前にぼろりと勃起ペニスを突き出した。男

のそれはどす黒い先端がパンパンに膨れ、やや細長い幹をみりりと反り返らせている。
「兄貴の真珠ちんぽに比べると見劣りするかもしれねえけど、俺のもなかなかのもんだろう？　さあ、気持ちを込めてしゃぶってくれよ、魔法少女ちゃん」
「い、いやだ……むぐぅうっ」
鼻をつままれ、やむなく開いた口にぐぶりと陰茎がねじ込まれる。
痩せぎすはフレイアのツインテールを両手で掴むと、ぐいぐいと腰を振り立て、少女の口の中を縦横無尽に突き始める。
「んぐ、むぐぅう、んぐぅうう〜〜っ」
「歯を立てるんじゃねえぞお……おい、そっちはどうだ？」
スキンヘッドに声をかけると、男はじゅるりと舌なめずりをして、びっしょり濡れた口元を手の甲で拭った。
「まだ硬い感じだけど、しっかり濡れてるぜ。兄貴のちんぽでやられまくったとは思えねえ、いい色艶のまんこだぜ。俺、もう我慢できねえ」
スキンヘッドがベルトを緩め始めると、ここで北宮が初めて口を開いた。
「てめえら構図とか考えろよ。フレイアちゃんの初出演ビデオなんだからよう」
初出演ビデオ……痩せぎすの陰茎をくわえさせられているフレイアの耳に、聞き捨てならない言葉が飛び込んできた。
（ビデオってどういうこと？　こいつら、あたしがエッチなことされてるのをビデオに撮

って、まさかそれを……？）

「おっと、違った。お前は魔法少女エターナルフレイアのそっくりさんだ。そっくりさんのおまんこにちんぽがずぶずぶねじ込まれるところを、ばっちり撮影してやるからな」

「よし、俺の膝の上に乗りな、そっくりさん」

スキンヘッドはソファに腰を下ろし、フレイアを抱き寄せた。

そして股を大きく開かせた格好で、股間でそそり立つ肉棒の上に座らせる。まだ少ししか濡れていない花びらに、ごりっと硬いものがあてがわれる。

「あっ、いや……あぁあああっ！」

ずぶぶっ、ぬぶぶぶ……自らの体重とスキンヘッドの抱き寄せる力が合わさって、少女の肉穴に勃起ペニスがあっけなく呑み込まれる。

男の肉棒は長さこそ並みだったが、その太さは北宮以上。まだ成長途上の肉穴を内側からこじ開けられ、フレイアはその衝撃に身を震わせ、わななく。

「うほほっ、いい締まりだぜ、さすがフレイア……のそっくりさん！　これじゃすぐにでも中出ししちまいそうだ！」

「やめっ、く、くるし……こ、こんなとこ撮らないでぇ……いや、だぁ……っ！」

「おい、上のお口がお留守だぜ」

「むぐぅ」

ぐいと横を向かされた少女の口に、痩せぎすの長い陰茎がねじ込まれる。

下からはスキンヘッドが激しく腰を突き上げ、痩せぎすは少女の頭を掴んで腰を振り立て、ピストンを浴びせかける。

ヴァギナに太短い肉棒が出入りする様子、愛らしい少女の唇に長い陰茎が突き込まれる様子、その一部始終をデジタルカメラのレンズが捉え、記録していく。フレイアがカメラの方に目をやると、北宮が熱心にカメラを操作しているのが見える。

（撮られてる……あたしのアソコと口に、こいつらのちんちんがねじ込まれてるのを、全部撮られてるんだ）

北宮がこの映像をどのように使うつもりなのか、フレイアには見当もつかないし、想像もしたくない。

だが、フレイアを「そっくりさん」と呼ぶからには、この映像を何らかの方法で流通させ、それで金儲けをするつもりだろうと思われた。魔法少女コスプレのアダルトビデオが流通している中、本物のフレイアがそっくりさんとしてアダルトビデオに出演しているとなれば、さぞや話題になるだろう。

（こんなの……ただエッチなことをされるより恥ずかしいよぅ……）

もはや目尻に熱い涙が浮かぶのを、少女は堪えきれなかった。

人を守り、世界を守るために魔獣と戦ってきた。なのに、そんな自分たちをいやらしい目で見る人たちがいる。

自分の戦いは、そんな人間をも守るためにあったのか。

「うっ、う、ひっく、ひっく……」
「お？　フレイアちゃん、泣いてるの？　可哀そうになあ、俺らみたいなヤクザ者に勃起ちんぽ突っ込まれて、悔しいだろうなぁ」
「でもしょうがねえんだ、これも俺らの仕事だからよう」
悔しさに思わず目をつぶったフレイアは、カメラを構えていた北宮が、いつの間にか背後に近づいていたことに気付かなかった。
「ッ？」
ちくり、と首筋に鋭い痛みを感じた。
だが痛みはすぐに引いて、その代わりにくらりと軽いめまいを覚える。よろける肩を北宮が掴み、痩せぎす男にしっかり支えるように言う。
「もう難しいことは考えるなよ、ガキ。お前は求められるままに股を開いて、ちんぽをくわえ込んでいればいいんだよ。そのうち、何も考えられなくなる」
（何……言ってる、の……あたし、何をされたの……）
じわりと頭の奥が痺れ、身体をまっすぐ支えられない。そんな少女の髪の毛を掴み、痩せぎす男がごつごつと下腹部を打ちつけてくるが、さっきほどの苦しさは感じない。
「おっ、急にまんこがこなれてきましたぜ。スケベ汁が溢れてくらぁ」
「やっぱり静脈注射は効き目が早いですね、こいつ、目がとろんとなって、ちんぽに吸いついてきやがる」

静脈？　注射？　彼らが何を言っているのか、フレイアにはわからない。
ただ、さっきまでの悔しい気持ちや、情けない気持ちにフィルターがかかったようになり、まともに考えがまとまらない。
それどころか、スキンヘッド男の陰茎の動きが「気持ちいい」とさえ思ってしまう。フレイアは痩せぎすのペニスに舌を絡め、自分からちゅうちゅうと陰茎を吸い立てる。
そうすることがごく自然なことのように思えた。
「お前ら、遠慮するこたぁねえ。体力の続く限り、そいつを輪姦わしてやれ」
兄貴分である北宮の言葉に、チンピラたちは悪辣な笑みを浮かべ、さっきよりいっそう激しくフレイアの上下の口を犯し始める。
ずっぽずっぽ、じゅるっ、じゅるっと淫らな音が響き、少女は潤んだ眼差しでやがて甘い声を漏らし始める。
「んふぅっ、んっ、んあぁ……ちんちん……すごい……ちんちんすごいよぉ……」
「ひひっ、すっかり蕩けてやがる。よし、今度はそのでか乳でちんぽを挟んで擦るんだ」
言われるままに胸の谷間に痩せぎすの陰茎を挟むと、スキンヘッドが大きく腰を突き上げる。すると自然と少女の身体が浮き上がり、乳房の間で長い肉棒が擦られる。
「ふわ、ふあぁっ。ちんぽっ、ちんぽすごいいっ」
乳房の間から突き出る亀頭に舌を絡め、頬をすぼめてじゅるると吸引する。
北宮がフレイアに打ったのは、南原がクリスタに与えたものと同じ、合成薬物。

だがクリスタと違い溶かした錠剤を直接静脈に注射したので、速攻でその効き目がフレイアの神経を侵していた。
その拳で、蹴りで、圧倒的なパワーで魔獣を圧倒してきた魔法少女が、化学的な薬物によって理性を縛られ、正気を失い、犯されてよがっている。自分でも何かおかしいと思っているのだが、その身に加えられる苛烈な暴力が、少女から思考力を奪っている。
「おらどうだ、まんこをずぼずぼされて気持ちいいかっ」
「いいれふぅ、おまんこ感じるぅ、おちんちんでまんこずぼずぼされるのいいれふぅ」
「よおし、ならまんこにザーメンぶち込んでやるから孕めっ、妊娠しろ！」
ソファを軋ませながら、スキンヘッドが腰を突き上げると、フレイアの爪先は完全に浮いてしまう。太短い陰茎を根元までぶち込まれ、赤の魔法少女はだらしない笑みを浮かべて悶え狂う。
「あひいっ、ひんっ、ひぃいいんっ。ちんぽっ、ちんぽしゅごいいぃっ」
「俺はそのパイオツと顔にぶっかけてやるぜ、いくぞぉおっ」
「うぉおっ、出るっ、出るぞぉお！」
「何これ、やらぁ……んぎぃっ？　らめ、何からめぇ～～っ！　あひゃああ、あぎひぃいいぃ～～～っっっ！」
どくっ、どくっ、どびゅっ。びゅるっ、びゅるるる～～～っっ。
二人のチンピラはほぼ同時に絶頂に達した。痩せぎすの陰茎から噴き上がった白濁がフ

レイアの美しい顔に、髪にまき散らされ、乳の谷間に小さな白い池を作る。
びくびくと腰を痙攣させるスキンヘッドは、少女の子宮から溢れんばかりの大量の体液をいつまでも吐き出し続ける。二人の男に挟まれ、魔法少女は生まれて初めて感じるエクスタシーに切なく痙攣を繰り返す。
（はぁ、はぁ……何これ……あたし、どうなっちゃったの……）
自分が変になっていることはわかっていたが、呼吸さえつらく、頭が働かない。よもや自分が薬物を打たれたとも知らず、フレイアは絶頂の余韻に打ち震えるばかりだった。

「何だこれ……マジですげえ……！」
とある場所、とある時間。
彼は一人自宅のパソコンで、アダルトサイト巡りをしていて、その動画を知った。
初めて見る有料サイトだったので少し警戒していたが、「あの」魔法少女エターナルフレイアのそっくりさんという惹句（じゃっく）に魅かれて入会してしまったのだ。
『あぁ～っ！　またきちゃう、変になっちゃうぅう～～っ！』
『おらぁ、これで中出し四発目だ！』
『口にも出すぞ、ちゃんと飲めよ』
モニターには二人のガラの悪い男に犯されている少女の姿。
真紅のツインテール、大きな胸、気の強そうな美貌には僅かにモザイクがかけられてい

真下には屹立した肉棒、そこに汚れなき処女穴がゆっくりと下ろされ、ついに亀頭がひたりと膣穴にあてがわれる。
「おおおおっ、クリスタちゃんの処女がついに……」
「くそっ、この瞬間を目に焼きつけてやる！」
嫉妬と羨望の視線を浴びた肥満青年は、満面の笑みで唇の端から涎を垂れ流す。親の保険金を全て投じて得た、魔法少女の処女を奪う権利、今こそそれを行使する瞬間。
そして哀れな犠牲となった少女に注がれる無数の淫らな視線――最低にして最悪の初体験を前に、少女の唇が微かに動いて消え入りそうな声が漏れる。
「い、や……やめ――――」
ずぶっ、めりめりめりっ。
「いぎぃいいいいっっ」
勃起男根に細身の少女の肢体が、自らの重みで沈み込んでいく。
処女膜こそ保っていたが、少女の膣は自慰行為により、たっぷりの蜜で溢れていた。
それは隆々とそびえたつ肉棒にまとわりついて潤滑油となり、易々と、あまりにも易々と侵入者を許してしまった。それでも、内側から強引に拡張され、ぎしぎしと肉がこじ開けられる衝撃に、クリスタは絶叫した。
「いやぁあああああ！　おちんちん入ってくるッ、本当に入ってくるぅうっ！　いやああ、私こんなの、こんなのいやだぁああっ」

「もう遅いよ～ッ。ほおら、もう根元までずっぷり入っちゃってるよ。みんなにもっとよく見せてあげようね」

肥満男がぐいと少女の股をさらに広げると、照明スタッフがすかさずクリスタの股間にスポットライトを浴びせる。

男の陰茎は既に半分以上少女の胎内に打ち込まれ、確実に処女膜が引き裂かれたのが丸見えだ。ゆっさゆっさと男がクリスタの体を上下に揺すると、「じゅっぷじゅっぷ」と濡れた生々しい音が結合部から漏れ聞こえる。

「ふひょっ、なんてきついんだ、さすが処女……でもオナニーの後だから、ぬるぬるしてとっても気持ちいいよぉ、クリスタちゃん～っ」

「いやぁっ、言わないでッ、見ないでぇえぇっ」

少女の懇願を聞く者など誰もいない。むしろこの光景をクリスタ以外の全員が待ちわびていたのだ。

現役魔法少女アイドルの処女喪失という、この上なく刺激的な光景に観客たちは言葉もなく、視線という名の生殖器で少女を陵辱し、尊厳を打ち砕き、辱め続ける。

「けど、思ったほど痛がらないんだねぇ。クリスタちゃんはオナニーするようなエッチな女の子だから、実は初体験でも感じてるんじゃないの？」

「そんなことっ……」

と言いつつ顔を背けて黙ってしまうのは、実を言うと破瓜の痛みはそれほど長続きしな

かったから。「接待」を続け、セックス以外の淫らな行為を全て経験してきたクリスタの肉体は、いつしか愛撫に敏感に反応するようになっていた。
例えばそれは今日初めて会った男の陰茎をしゃぶっている時――その男の精液を飲まされた時――そして首筋を、乳首をねぶられ、揉まれた時。
それらの刺激についさっきまで確かに処女だった少女の肉体は、痛みでも嫌悪でもない「快感」を感じるようになっていたのだ。
（違う、ちがうちがう！　私は、こんな卑劣な人のおちんちんで気持ちよくなったりしない！　こんなのちっともよくなんかない！）
頭でいくらそう思っても、身体の奥から熱い蜜が溢れてくるのは否定できない。
硬くて熱い肉棒がゴリゴリ膣壁を擦り立てるたび、クリトリスがきゅんきゅん疼くのを自分でも抑えきれない。
「おほうっ？　おまんこの奥からねっとり熱いおつゆが、ちんぽに絡みついてくるよ。ややっぱりクリスタちゃん、俺のちんぽで気持ちよくなってるんだろう？」
「いや……ちが……あ、ふわ、あっ、あっあぁ～～～っ」
男は感極まったのか、クリスタを背後から貫いたまま、立ち上がった。
見た目よりも力のある男の腕に抱きかかえられ、魔法少女はM字開脚のまま大きく上下に揺さぶられる。濡れた花弁に赤黒い陰茎が出し入れされるたび、結合部からは少女自身が分泌した、透明な汁が飛沫となって飛び散る。

「ほおら、クリスタちゃんのおまんこ、エッチなおつゆでびしょびしょじゃないか。処女まんこ、ちんぽでずこずこされて、気持ちいいんだろう？」
「あぁあッ、違うッ、違いますぅうっ」
だが、処女を喪ったばかりの魔法少女が、苦痛以外の感覚に悶えよがっているのは、誰の目にも明らか。少女の股間に破瓜の鮮血はあったものの、今やそれ以上に大量の愛液がペニスの抽送と共に飛び散り、スポットライトの光を反射する。
その美しくも淫らな汁は細かな粒子となって、客たちにも降り注ぐ。
「おぉおっ、く、クリスタちゃんのおまんこ汁だああっ」
「お、俺の顔にもかけてくれええっ」
口々にそう叫ぶ男たちに応えるように、肥満青年は魔法少女を抱え貫いたまま、ステージを右に左に移動する。
「そらそら、魔法少女のまんこ汁シャワーだ！　もっともっと気持ちよくなって、いっぱいおつゆを出そうねクリスタちゃん！」
「いっ、いやぁああ～～～～っ」
羞恥に悶える魔法少女はしかし、身体の奥からどんどん蜜が湧き出るのを抑えられない。堪えようにも、深々と突き立てられた陰茎の先端ががつがつと子宮の入り口をノックするたび、快感が身体中に広がっていくのだ。
（だめぇええ、お股気持ちいいっ！　お腹の奥が、熱くて……痺れちゃうぅう）

ずぶぶっ、じゅぷっ、ずちゅっ……逆駅弁ファックとでも言うべき格好でクリスタは犯され続け、見られ続け……そしていつしかその状況に感じ始めていた。
「ひいっ、ひいいいっ！　そんなに、は、激しく……おちんちん、だめぇえっ」
薬物による精神の解放、オナニーによる下準備、そして南原の正体……次々に起こる衝撃の出来事が、魔法少女をただの無力でかよわい少女に戻してしまっていた。
じゅぽ、じゅぽっと湿った音はいっそう大きくなり、飛び散る飛沫の量は増していく。
（わたし、このままじゃ……おかしくなっちゃう……）
「おおっ、急におまんこがきゅんきゅん締めつけて来たよ？　い、イキそうなのかい、クリスタちゃん。お、俺もそろそろヤバイ……」
（イク……私、イッちゃうの……？　こんな大勢の人たちに見られながら、名前も知らない人のおちんちん入れられて……）
魔法少女フォーチュンクリスタ。
聖なる調べで魔獣を浄化する美しく可憐な魔法少女。
だが、その精神はただの少女に過ぎない。守るべき人々、恋慕していた青年の本性を知った時、少女の魂は粉々に打ち砕かれ――心は絶望という名の毒に侵された。
「ふぉおおお、いくよ、クリスタちゃんの子宮にっ、俺のザーメンぶち込んでやるぞぉおおおおっ！」
凄まじい勢いで腰を突き上げる青年に翻弄され、青い髪の魔法少女はこみ上げる愉悦に

心と身体を委ね、こう叫んでいた。
「いいいいっ！　イクゥウッ、い、イッちゃうぅう！　わたしっ、おちんちんで……
お、おまんこイッちゃうぅうううう～～～～っっっ」
「うぉぉあああああ」
どくんっ、びゅっ、びゅっるるるっ、びゅるるる～～～っ。
二度目とは思えぬほど大量の白濁液が、ポンプのように少女の子宮に打ち込まれる。
それはとても子宮に納まりきらず、肉と肉との結合部の合わせ目から「びゅっ、びゅるっ」と噴きこぼれ、ぼどぼどとステージに垂れ落ちる。
「ひあああああっ、熱いっ、あついいいいっ」
ぷしっ……ぷしゃあああっ、ぴゅっ、ぴゅるるっ。
精液を注ぎ込まれる少女の股間から、透明な潮が勢いよく迸る。
それは飛沫となって観客たちの頭上から降り注ぎ、客席から歓声が上がる。
「クリスタちゃんの潮噴きだぁあああっ」
「ク～リスタッ！　ク～リスタッ！」
目の前で処女を喪ったとはいえ、見事な処女喪失、そして中出しと潮噴きまで見せられた観客のクリスタコールはいつまでも続いた。
その声を遠くに聞きながら、哀れな魔法少女はゆっくりと空白の中に意識を沈めていったのだった……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

隔月発売

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

隔月発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!

電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

コミック UNREAL アンリアル

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。